

男女共学を原則とする大学教育が進展し、国公私立の大学に在学する学生二七四万人（平成十二年度）中、女子学生が二一・六％、約九九万人に達した現在もなお、お茶大が女子大であり続けるのは、伝統に裏付けされた女子高等教育機関としての役割と優れた教育環境を維持することが社会に対するお茶大の義務であると考えるからである。現に、女性の人材養成に女子大という教育環境が極めて有効に働き得ることは、かつて男女同権論やさまざまな差別撤廃論がさかんに唱えられた欧米先進国、とりわけアメリカにおいて一時急激に減少したかつての名門女子大学が最近になって復活、再建の動きを見せていることから明らかである。優れた女子大の存在は、女性のためというよりは、女性の活躍を必要とする社会が求めているものであつて、その背景には、共学大学よりも女子大のほうが社会の各界に活躍する女性を生み出す比率はるかに高いという事実がある。

我々はこのことを確実なデータで実証する目的で、最近「卒業生のライフコースと国立女子大学の将来像」の調査を実施した。学部卒業生と大学院修了生の両者について行ったサンプル調査の結果はまだ学部卒業生のデータがそろつた段階であるが、総数一万七八九二人の新制大学卒業生の二五・二％に相当する四五〇〇人を卒業年次別に調査したところ、七一・九％の有効回答があり、この種の調査としては異例の高回収率であつた。詳しい調査結果はいずれ公表の予定だが、例えば「受験理由と本学のイメージ」のデータでは、伝統・希望分野・教育環境がお茶大を選んだ理由のベストスリーにあげられている。

## ●東京外国語大学（国立）

# 知的国際貢献の拠点として

学長 中嶋嶺雄

## 二十一世紀の大学像をめぐる議論

国際化、情報化、グローバル化という二十一世紀の不可避の歴史潮流のなかで、日本の大学は果たして国際競争力をもち得ているのか、私自身が現在責任を負っている大学（東京外国語大学）は国際社会への貢献にそなえて、どのように変わらなければならないのか。学長として日夜考え、かつ改革しようとしてきたのは、これらの点であつた。この間、わが国における大学関連の議論も活発になり、二十一世紀の大学像についても、理念と政策の両面から、かなり突っ込んだ本格的な論議が交わされていて、すでに具体的な提言もおこなわれている。

まず文部省の大学審議会は一九九八年十月に『二十一世紀の大学

以上のことから、お茶大の改革の基本方針は女子大としての存在の徹底化以外にあり得ない。教育・研究の質を高める方策もこの方針に沿って進めており、例えば、教育・研究の重点化をはかつて予算の重点配分を始め、高度の女性研究者養成のための研究施設の検討に着手し、教育環境の整備の一つとして学生・教職員のための保育施設の設定に動き出した。

また、大学の教育と運営体制の見直しと組織再編はいますべての大学で行われているが、そのためには講座・学科・専攻・部局にとられない全学的視野のもとの人事管理が欠かせない。学長を中心とする大学執行部の人事管理の一元化は、お茶大のような大学教員二四二名、事務職員一〇二名という「小さな大学」だからこそ必要であり、また実施可能な条件を備えている。

「小さな大学」は限られた少数の教員で限られた分野の教育・研究を行わざるを得ないが、大学を「大きく使う」ポイントは国内外の大学・研究機関との交流にあると考えている。二十一世紀の大学は、個性化と同時に国際化を必須のものとする。ことは論を俟たない。

我々の将来計画もまた、お茶大を国内はもとより国外にも開かれた大学として、世界の女子高等教育機関の中核的存在に位置付けたということである。

●（さとう・たもつ）一九三四年生。中国文学。著書『中国の詩情』（日本放送出版協会）『漢詩のイメージ』（大修館書店）。

像と今後の改革方策について』と題する答申を発表している。この答申は、「競争的環境の中で個性が輝く大学」というやや文学的な副題もさることながら、従来の審議会文書の枠を大きく超えた内容をもつものであり、たとえ答申の基本方策を批判する場合にあつても決して無視することのできない意味をもつていた。具体的には、従来の高等教育で十分に位置づけられていなかった大学院の教育・研究体制を明確にし、とくに高度職業人養成の問題を政策化したことなどが特徴的であつた。大学審議会は引き続き国際化、グローバル化の問題や情報革命の問題に取組み、二〇〇〇年十一月には『グローバル化の時代に求められる高等教育の在り方について』と題する答申をおこなっている。まさに二十一世紀の最終段階でまとめられた大学審議会の最後の答申であつたが、二十一世紀の大学が当面する新しい課題に挑戦しようとするものであり、日本の大学の国際化や留学生政策にも具体的に言及している。この間、一九九九年からは国立大学の設置形態に関する問題、とくに独立行政法人化の問題が大きくクローズアップされるとともに、評議会と教授会の関係など大学運営の改善をはかる目的で、学校教育法や国立学校設置法などの大学関連の法律が改正され、二〇〇〇年四月から施行された。

## なかなか進まない改革

こうして二十一世紀の大学像をめぐる論議と政策はかなり広範に提起されているのであるが、これらの改革方策が個々の大学において実行に移されるテンポは全般的に依然として遅々としている。私

## 二十一世紀のわが国の大学像や大学地図も、国際比較の視点から大きく塗り替えられるだろう。

自身、アメリカの大学——カルフォルニア大学サンディエゴ校国際関係・太平洋研究大学院（IR/PS）——で一年間教鞭をとった経験から日本の大学の現状を批判したことが契機で一九九三年秋から大学審議会特別委員を二期にわたってつとめ、一九九五年九月からは学長にも就任したので、折りに触れて大学審議会の答申などを学内に紹介し、二十一世紀の大学像に沿った大学改革の方向を示しているつもりではあるが、学内は永い歴史と伝統に安住してしまっているのか、小さな既得権の固持に執着してせめぎあっているからなのか、改革がなかなか進まない。大学改革と国際競争力の強化をめざして、学長同士が夢を語り合ったことから始まった東京工業大学、一橋大学、東京医科歯科大学との「四大学連合」構想に関しても、去る十二月の評議会でもようやく満場一致の機関決定を見たものの、様々な曲折や抵抗が学内にはあった。要は、文部省が主導したり、大学審議会が提言したり、学長がリーダーシップを発揮して改革を進めようとしたりすると、必ず抵抗やサボタージュがあるという特殊日本的な大学の体質が、とくに人文・社会科学系には多いのではなからうか。

### これから重要となる国際比較の視点

そうしたなかで、留学生政策などは比較的に改革を進めやすいと

いえよう。東京外国語大学においても、一年間の英語による短期留学プログラムとしての I S E P T U E S (International Student Exchange Program Tokyo

University of Foreign Studies) や U M A (University Mobility in Asia and the Pacific II アジア太平洋大学交流機構) のリーダーズ・プログラムが実行されつつあることもあって、このところ世界各国・各地域からの留学生が急増しており、現在では約六五〇名と学生総数の一五%に迫っていて、国立大学のなかでは最高の留学生比率になっている。留学生が増えるということは、それだけ国際競争力を備えていることでもあるので、さらに改革を進め、大学の国際化、グローバル化をより一層推進することによって、キャンパスが居ながらにして異文化交流の拠点となり、知的国際貢献の一環を担う場にならなければならないと、学長としては考えている。

いずれにせよ、今日のような歴史的な移行期においては、日本の大学を国際的な座標軸と次元において位置づけ、いわゆるグローバル・スタンダードで日本の大学を計ってみるという国際的次元での大学評価がいまや是非必要だといえよう。なぜなら、国際化、情報化、グローバル化が進展すればするほど、大学間の壁は低くなるのであり、そもそも大学には国家や民族・エスニティーなどによる障壁があつてはならないはずであるだけに、「日本人が日本語で日本人に教える」という「知の鎖国」(intellectually closed shop) の状況が一般的な日本の大学を、単に国内的な競争環境においてのみならず、世界のなかで見るといふ国際比較の視点が不可欠だからで

ある。同時に、日本の大学をめぐっても二十一世紀においては国際競争が研究、教育、人事、学生確保、施設整備などのあらゆる分野でいよいよ本格化するであろうし、二十一世紀のわが国の大学像や大学地図も、国際競争力を十分に備えた大学という観点から大きく塗り替えられ、あるいは再編されてゆくに違いない。

●(なかじま・みねお)一九三六年生。国際政治学、著書『国際関係論』(中公新書)、『中国に呪詛される日本』(文藝春秋)、『北京列烈』(筑摩書房)、『現代中国論』(青木書店)。



Photo by Ichige Minoru

## 東京芸術大学 (国立)

### 感性教育

学長 澄川喜一

#### 感性教育のはじまり

明治維新の五年前(一八六三)、伊藤博文ら五人の長州藩士が、ロンドン大学に留学した。その内の一人、山尾庸三は、グラスゴーに行き、昼間は造船所で働き、当時の進んだ西欧文明に衝撃を受けつ、新しい日本は技術立国を目指すべきだと、夜はアンダーソン・カレッジ(現在のストラスクライド大学)で学んでいる。

帰国後、先づ人材養成が第一と、人づくりは、ものづくり、国づくりに通じると、工部大学校(現東京大学工学部の前身)の設立に尽力した。同時に、柔軟な発想と、常に創意工夫のできるバランスのとれた感性豊かな人材を、と、明治九(一八七六)年工部美術学校が開設された。我国最初の感性教育がスタートした。